公益財団法人日本陸上競技連盟
陸上競技研究紀要
第11巻, 167-169, 2015
Bulletin of Studies
in Athletics of JAAF
Vol.11,167-169,2015

第２回世界リレー大会帯同報告書

鳥居　俊
日本陸連医事委員会委員

１．はじめに

第２回世界リレー大会は2015年５月２日～３日に昨年の第１回と同様にバハマのナッソーで行われた。選手団は４月26日に成田で前泊し、27日11時過ぎに成田空港を出発、同日ニューヨークで１泊ののち、28日午後ナッソーへ到着した。今大会での入賞は来年のリオデジャネイロオリンピックのリレー種目の出場権が得られることになっていた。

２．選手団の構成

専務理事　尾縣貢団長、麻場一弘監督とコーチ４名（男子短距離：苅部、土江、女子短距離：瀧谷、太田）、メディカルスタッフ３名、渉外担当１名、競技者（4 × 100M、4 × 400M）18名（男子９名、女子９名）に近畿日本ツーリスト加藤氏の合計29名の選手団であった。このうちメディカルスタッフは医師（整形外科医）１名、トレーナー２名（男子１名、女子１名）であった。

３．派遣前準備

今大会の代表は４月19日に行われた織田記念陸上競技大会の結果に基づいて決定されたため、派遣直前の22日であった。そのため、派遣前の特別なチェックはできなかった。男女ともリレーのナショナルチームが作成され、合宿等の活動をしていたため、ある程度の把握はできているはずであった。また、３月中に米国でのレースで桐生選手が追い風参考ながら９秒台を出すなど明るい材料もあった。

しかし、男子は実際に４月からの国内の競技会では中心となるはずの選手が急性外傷やコンディション不良などで欠場し、4 × 100Mは社会人２名大学生３名で、4 × 400Mは大学生４名の構成となった。女子は対照的に全員がナショナルチームメンバーから選出された。

代表決定後、メディカルアンケートの提出をトレーナーを介して各選手に依頼し大部分は出発前に提出されたが、成田空港で提出した選手も２名いた。なお、TUEを必要とする選手はいなかった。

今大会は渡航期間全体の日程が10日間であり、選手数も少なかったため、持参する薬剤類（内服、外用、注射）を従来の半分程度に厳選した。

４．渡航および現地の状況

ニューヨークまで13時間余りの渡航であり、エコノミー席のため疲労もあり、また時差13時間もあったため到着日や翌日は体調が万全でない選手もいた。ニューヨークから３時間余りのナッソーはニューヨークと時差がなく、サマータイムのため日の出が現地時間の７時頃、日没は夜19時頃であった。

選手村はAtlantisというリゾートホテルであり、空港からバスで１時間弱であった。欧米人を中心とした海浜高級リゾートであり、リゾート客が闊歩する選手村内に当初は違和感もあったが、間もなく気にならなくなった。選手村に到着後、ADカードを作成、各自の宿泊室へ移動した。居室はほとんどがツィンで、バストイレ付で広かった。トレーナー室を１室設け、今回は本部室は設定しなかった。

ナッソーの気候は最低気温15度前後、最高気温は30度を超えると予想されていたが、前半は雨天や曇天が多く、雷雨やスコールのような強雨のこともあった。また、夜間は肌寒く感じた。

高級リゾート施設のため衛生状態は良好であったが、水道水は飲用に使わないように事前に伝えられており、ミネラルウォーターを飲用に用いた。

居室内の清掃にはホテルスタッフが毎日現れ、ゴミの回収、タオルやシーツの交換を行った。

洗濯施設はなく、おそらく選手はみな手洗いでしのいだと思われる。

食事は大会用の食堂が４月30日夕食からとなったため、28日～30日昼までは施設内の３か所で使用できる食事チケットが配布されたが、しばしばそのうちの１か所が営業しておらず、ピザ屋やバーベキュー料理店は摂取栄養素が偏る心配があった。30日夜からの食堂ではバイキング形式で提供されたが、この国の習慣か。朝食は生野菜がなくパン類とベーコンや卵（ゆで卵かスクランブルエッグ）、フルーツ、ヨーグルトであり、飲み物はコーヒー、紅茶が主であった。一方、昼食と夕食はパンだけでなく米(ピラフ的なもの)、スープ、肉料理、魚料理、カットフルーツ（メロン、スイカ、リンゴ、パイナップル、ドライフルーツ)、と日によってケーキなどのデザートが置かれていた。全体としてアジア大会や世界選手権などの国際大会と比較して料理数が少なかった。このような理由もあってか、選手たちはホテル内のスターバックスのコーヒーやサンドウィッチをしばしば利用していた。

競技会場であるメインスタジアムとサブトラックは５～６㎞離れており、30分間隔に出されるバスで移動したが、島内の道路の渋滞状況により所要時間はまちまちであった。なお、渋滞時に警察の先導で道を開けて優先通行も実施され、最短で７分で移動できた時もあったが、あまりのスピードに気分が悪くなった選手もおり、コーチも恐怖感を感じたと話していた。

競技場、サブトラックの走路自体は特に問題がなかったが、サブトラックのフィールドは芝の凹凸が多く、油断すると捻挫をする危険もあった。また、雨であちこちに大きな水たまりができることもあった（図１)。

５．現地での医療活動

本大会では競技前のドーピング検査は通知がなく、行われなかった。大会本部の医務室はメイン競技場内にあったと思われるがアクセスできず、大会側トレーナールームはサブトラックの入口付近に10台ほどのベッドが並べられていたがあまり稼働しているように見えなかった。

選手村トレーナー室には練習がない時は２台のマッサージベッドを並べてトレーナーによるケアが行われた。ドクターズバックはトレーナー室に置き、診察はトレーナー室で行った。競技時間が夜間となるため、トレーナーの予約は24時ごろまでとなることもあった。

競技場では競技会終了日まで、サブトラックに日本チームテントを確保し（図２)、トレーナーベッドを置き、ドクターとトレーナーが常駐し診察やケアを実施した。今回は帯同ドクターが１名のためドーピング検査対象となった選手がいた場合には同席しないこととした。

本大会中の救急搬送事例はなかった。しかし、４継男子選手の１名が事前の練習中に左腓腹筋の１度と思われる筋損傷を受傷し、出場を断念した。４継男子選手の１名は足趾の胼胝による疼痛を訴え、圧迫部の除圧パッドをトレーナーが作成した。マイルの男子選手の１名は前日の練習時に膝痛を訴え、診察後トレーナーのケアと内服の使用で出場した（派遣されたのが４名のため欠場できなかったこともある)。

さらに、４継女子選手の１名は足関節部の痛みを訴え内服を希望し、前日より服用を行った。また、マイルの女子選手の１名が２日目のＢ決勝のウォーミングアップ中に膝後方の痛みを訴え、内外膝屈筋

図１　サブトラックの水たまり

図２　日本チームテント

の腱障害と診断し、内服を使用した。この２名も予定通りに出場した。競技に影響のないものとして、１名の男子選手に手指の爪周囲膿瘍があり、針で小切開し排膿させることでほぼ治癒した。

内科疾患としてはマイルの男子選手の１名が前日より発熱と咳のため内服を使用した。同室の選手への感染を憂慮して別室にすることも考慮されたが、大会本部へ問い合わせてもらうも空室がない状況で幸いに内服により咳がおさまったため部屋の変更はしなかった。ただ、発熱はレース日の昼にも解熱しておらず、37.5度であったが、選手自身は体調不良を感じないとのことであった。また、スタッフにも２名風邪による内服の使用が必要となり、帰国時までの内服を手渡した。従って、消炎鎮痛剤、胃粘膜保護剤、総合感冒薬、鎮咳剤を多数使用することになった。

５．ドーピングコントロール

派遣選手中にこれまで検査対象となって検査を受けた経験のない選手は１名のみであった。

競技後の検査対象となったのは男子４継決勝（図３）の１名のみであった。すでに国内、海外での多くの大会で検査経験があり、問題なかった。

６．まとめ、反省

本大会は代表決定が直前であったこと、男子はナショナルメンバーの主力選手が国内選考会で欠場して若手選手中心となった（図４）ため、帯同メディカルスタッフ（図５）が知悉していない選手も含まれた。また、選考後の欠場者もあり、ほぼぎりぎりのメンバーで出場することになり、新たな傷病者が出ないことを祈ったが、結果的に１名の欠場を除き全員が出場できた。

図３　男子４×100M

図４　全員の集合写真

図５　メディカルスタッフ
（田村 TR、鳥居、村上 TR）